

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介します



合田 直弘

・ The Race That Stops A Nation
「国の動きを止めるレース」と称される、オーストラリアにおける国民的行事「メルボルンC」の開催が、11月6日（火曜日）に迫っている。日本でも馬券が発売されるのが既に決まっているこのレースに、有力馬の1頭として出走予定のアヴィリアス（騙4、父ビヴォタル）が、今月のこのコラムの主役である。興味深いのはその血統背景で、同馬の母の父はサンデーサイレンスなのだ。

シェイク・モハメドの生産組織ダーレーが生産し、シェイク・モハメドの競馬組織ゴドルフィンが所有するのがアヴィリアスである。同馬の母アレックスサンドリアは、シェイク・モハメドの兄で、ドバイの元国王であるマクトウム・アル・マクトウムの生産所有馬で、その母（アヴィリアスの祖母）テレシユコワは、シェイク・モハメドの所有馬だった。

テレシユコワが生まれたのは92年で、2歳になった94年に仏国のアンドレ・ファール厩舎からデビュー。95年までのシーズンで、G3カプール賞（芝1200m）を含む3勝を挙げた他、G1モイグレアスタッドS（芝7F）2着、G1モルニー賞（芝1200m）3着などの成績を挙げた。この間、同馬が背負っていたのはシェイク・モハメドの臍脂と白の勝負服だったが、4歳となった96年にゴドルフィンの一員とな

り、サイード・ビン・スルール厩舎に転厩した。ゴドルフィンが世界戦略を展開しはじめたのは90年代の半ばだったから、そのごく初期の段階にゴドルフィンの青い勝負服を背負い、組織発展の一翼を担ったのがテレシユコワだった。

ドバイワールドC開催のG2ゴドルフィンマイルの前身である、当時は準重賞だったナドアルシバマイル（d1600m）を含む3勝を、ビン・スルール師の下で挙げたテレシユコワは、97年に繁殖入り。米国で数シーズン供用された後、来日して02年にサンデーサイレンスを交配されて受胎。その状態で英国に移動し、03年に現地で生まれたのがアレックスサンドリア（アヴィリアスの母）だった。

ディープリンパクトを交配するために、牝馬を日本に送るケースが増している。昨今だが、当時は、海外の生産者が日本供用種牝馬を利用する事例は、まだそれほど多くはなかった。マクトウム家にとつて当時、どうしても手に入れたかったのが、サンデーサイレンスの血脈だったようだ。

エド・ダンロップ厩舎所属馬として2年にわたつて現役生活を送り、2勝を挙げたアレックスサンドリアが、07年に愛国で繁殖入り。受胎のあまり良くない牝馬だったようで、繁殖入りして7シーズン目の14年に、同馬の3番仔として生まれたの

がアヴィリアスだった。

祖母テレシユコワ同様、仏国のアンドレ・ファール厩舎から3歳の春にデビューしたアヴィリアスは、そのシーズンの秋までに7戦して2勝。G2エル賞（芝2400m）でクラックスマンの2着となったのを含めて、3重賞で入着を果たしている。

そして、4歳となった同馬は4月に去勢をされて騙馬になり、同時に豪州のジェームス・カミングス厩舎に移籍。18/19年シーズンを迎えたのだった。

初戦となったのが8月4日にランドウィックで行われたハンデ戦（芝1600m）で、ここを首差で制して快進撃がスタート。次走は8月25日にローズヒルで行われたG3プレミアズC（芝1900m）に駒を進め、ここを快勝して重賞初制覇。9月15日にランドウィックで行われたG3キングストンタウンS（芝2000m）も白星で通過すると、10月6日にフレミントンで行われたG3バートカミングスS（芝2500m）も制し、重賞3連勝・通算4連勝を飾った。

もともと能力のあった馬だが、豪州の水が合ったことも間違いなきさうである。サンデーサイレンスの血を有するアヴィリアスが、メルボルンCでどんな競馬を見せるか。日本の競馬ファンの皆様もぜひご注目いただきたいと思う。